

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 看護マネジメント学分野	修了年度	平成 28 年度
氏名	亀田 芙蓉	指導教員 (主査)	河津 芳子

論文題目	看護系大学の新人教員が抱える困難感とその対応行動に関する研究 －実習指導の場面に焦点をあてて－
------	--

本文概要

目的：教員 1 年目の新人教員が、実習指導の場面において抱えている困難と、困難の解決のためにどのような対応行動をとっているのかを把握する。

方法：全国の看護系大学で承諾のとれた助教を対象に、自作した質問紙による調査を実施した。質問紙の選択項目は、統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 24 を用い、自由記述内容は、テキストマイニングにて分析した。

結果：対象者 136 名に配布し、74 名 (54%) より回答が得られた。対象者が抱えている困難は、「自分の能力に関すること」62 名 (83.8%)、「看護学生に関すること」51 名 (68.9%)、「実習環境に関すること」35 名 (47.3%)、「臨床指導者に関すること」23 名 (31.1%)、「上司・業務に関すること」52 名 (70.3%) であり、それぞれの困難への対応行動として最も多かったのは「上司・同僚に相談する」であった。また、困難の度合いと種類に基づきクラスタ分析によって対象者を分類したところ、(1) 低困難群 (18 名)、(2) 臨地対応困難なし群 (22 名)、(3) 学生対応困難なし群 (11 名)、(4) 高困難群 (23 名) の 4 群が抽出された。

考察：新人教員は困難の抱え方で 4 つのタイプに分けることができた。困難の内容を分類すると、臨地実習特有の困難と学内業務・人間関係の困難に大きく 2 分できることが明らかとなった。このような教員のパターンと困難の内容に即した新人教員への支援が必要であることが示唆された。また、新人教員は自身の能力の不足や現代の看護学生の在り方、実習指導者との協働、職場環境についての困難を抱えていた。それまでの経験年数、教員になる動機、性別などによって、困難及び困難に対する行動も異なることから、新人教員自身の姿勢も困難に関連していると思われる。

結論：新人教員の抱える困難の要因は、対象となる人物が「教員 (自身・他者を含む)」「学生」「臨地実習関係者 (指導者など)」の順番で多く、「臨地実習特有の内容」よりも「学内業務で抱く内容」に関連する困難が多かった。また、困難の内容別に、(1) 抱えている困難の内容が少ない、(2) 臨床に関する困難がない、(3) 学生に関する困難がない、(4) 抱えている困難が多いという 4 パターンの新人教員がいることが分かった。そして、新人教員が困難を抱えた際にとる行動は「上司・同僚に相談する」が最も多いが、必ずしも解決に至る行動ではなく、むしろ、ネガティブな感情を抱く原因となる場合もある。

キーワード：新人教員、困難感、対応行動、実習指導